

歴史の構想力 (Unthinking History)

1

野家啓一（東北大学名誉教授）

ハイデガー・フォーラム第19回大会

2024/9/21

1

I. Unthink をめぐって①

- Unthink : to remove from thought [OED]
- Immanuel Wallerstein, *Unthinking Social Science: The Limits of Nineteenth-Century Paradigms* 1991（『脱＝社会科学：19世紀パラダイムの限界』1993、本多健吉・高橋章監訳、藤原書店）
- 「われわれは19世紀社会科学を『脱思考する』必要がある、とわたしは信じている。19世紀社会科学の前提の多くが、わたしのみるところ、人を惑わせるものであり、窮屈なものであるのに、依然として、きわめて強力に我々の考え方をとらえているからである。これらの諸前提は、かつては精神を解放するものだと考えられていたが、今では社会的世界を有効に分析するにあたっての、最大の知的障害となっているからである。」

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

2

2

2. Unthink をめぐって ②

- 「Unthink をどう訳すかというのはなかなか難しい問題なんです。OEDを引くと、ほとんど400年前の1600年の用例がある。"think and unthink again" というもので、チョーキルからとっています。『考えを戻す、またその考えを振りほどく』という反復行為を表しているんです。(略)単純に『捨てる』ということは、unthink じゃないんです。いったん忘れるが、忘れたものが内部の力、想像力のもとになって働く、これが unthink なんですね。(略)つまり、考えを捨てるのではなくて、考えをほどくということ。考えを意識的、無意識的に影響を受けながら編み続けるということ。これは think and unthink なんですね。」鶴見俊輔「Unthink をめぐって：日米比較精神史」、『リベラリズムの苦悶』阿吡社、1994所収

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

3

3

3. 「大きな物語」の終焉と 二つの言語論的転回

- 「大きな物語」（ヨーロッパ中心主義）としての歴史哲学を unthink する必要性
 - ヘーゲル『歴史哲学講義』（1840）
 - ヤスパース『歴史の起源と目標』（1949）
- 第一次「言語論的転回」（20世紀前半）：歴史の分析哲学
 - G. Frege, B. Russell, L. Wittgenstein, C.G. Hempel「歴史における一般法則の機能」（1942）→ 被覆法則モデル（D-Nモデル）
- 第二次「言語論的転回」（20世紀後半）：歴史の修辞学
 - 「歴史学の作品を《物語性をもった散文的言説という形式をとる言語的構築物》として把握する。」ヘイドン・ホワイト『メタヒストリー』（1973）序説「歴史の詩学」

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

4

4

4. 「歴史の物語り論」への道程

- 野家啓一『物語の哲学』岩波書店、1996
- 野家啓一『歴史を哲学する』岩波書店、2007
 - 無文字社会にも歴史はありうる（川田順造『口頭伝承論』）
 - ハイデガーの口吻を借りれば「石くれは無歴史的」「動物は歴史貧乏的」であるのに対し、言葉をもつ人間のみが「歴史形成的」である。
 - 二つの言語論的転回の狭間で → 「物語り論」への助走
 - アーサー・ダント『歴史の分析哲学』1968（増補版は『物語りと知識』1985と改題）
- マイケル・ダメット『真理という謎』1978（「過去の実在」1969、「過去を変える」1964所収）
- 新田義弘『現象学と近代哲学』1995（「歴史科学における物語行為について」1983所収）

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

5

5

5. 「物語文」の定義と構造

- アーサー・ダント『物語としての歴史』（河本英夫訳）
- 物語文 (Narrative Sentences)：「あらゆる種類の物語に現れ、ごく自然な日常の話し方のなかにさえ入り込んではいるが、歴史叙述において最も典型的に生じるように見える種類の文。
（略）これらの文の最も一般的な特徴は、それらが時間的に離れた少なくとも二つの出来事を指示するという点である。このさい指示された出来事のうちに、より初期のものだけを、記述するのである。通常それらは、過去時制をとる。」
- 例文1 「三十年戦争は1618年に始まった。」
- 例文2 「アリストアルコスが紀元前270年に、コペルニクスが1543年に発表した理論を先取りしていた。」

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

6

6

6. 物語り文の具体的例示（黒田亘）

- 黒田亘「時間と歴史」1981（『知識と行為』1983所収）
- 「ダントが物語り文と呼ぶのは、時間的に隔たった二つ以上の出来事（ $E1, E2$ ）を考慮しながら、直接には $E1$ だけについて記述するような文のことである。具体的な例で言うと、たとえば結婚式の披露宴で媒酌人が新郎新婦を紹介する。本日でたく結婚の式をあげられたご両人が最初に出会ったのはかくかくの場所で、どここのテニスコートで、と。これはいまのダントの言い方でいうと物語り文の一例になる。」

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

7

7

7. 「理想的編年史」の不可能性

- 理想的編年史(Ideal Chronicle)の作者：「彼はたとえ他人の心のなかであれ、起こったことすべてを、起こった瞬間に察知する。彼はまた瞬間的な筆写の能力も備えている。『過去』の最前線で起こることすべてが、それが起こったときに起こったように、彼によって書き留められるのである。」（ダント）
- だが、このIC作者はたとえば「三十年戦争は1618年に始まった」という物語り文を語ることはできない。彼は戦争の開始を目撃できても、30年後の戦争終結を予測することはできない。
- 「一つの出来事についての真実全体は、後になってから、時にはその出来事が起こってからずっと後にしかわからないし、物語の中のこの部分は歴史のみが語りうる。」（ダント）

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

8

8

8. 過去の変更不可能性と可変性

- 「我々は確かに過去を変えることはできない。これは明らかに言語が我々に課した根本的な制約の一つだと思う。(略) すなわちOはPであったと私が言い、この言明が真であったとすれば、OはPでなかったとはもう言えない。実に簡単明瞭である。その意味でまさしく過去は変更不可能である。」 (黒田亘)
- 「だが一方『過去』が変化していると言いうるような、ある意味のとり方がある。つまり私たちがその出来事に因果的に作用するとか、t1時が過ぎたあとにもある事柄がt1時に対して生じ続けているからというのではなくて、t1時の出来事がその後の出来事に対して異なった関係に立つようになるがゆえに、t1時の出来事が新たな特性を獲得するという意味において、過去が変化するのである。」 (ダント)

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

9

9

9. 歴史の「出生性(natality)」と「可死性(mortality)」

- 黒田亘のダント読解
 - 「過去とは過去を語るわれわれの言語的行為によって構成されるものである。」
 - 「いったん起こった出来事の意義は決して完結することがない。」
 - 「私たちは現在の行為の意義を完結したものとして語る言葉をもっていない。」
 - 「誰も自分の最期を歴史に書くことはできない。」
- ハンナ・アーレントにならえば、歴史においては新たな出来事の出生(誕生)を押しとどめることはできないし、また可死的な歴史家は「歴史の終わり」を記述することはできない。
- 過去は未来と共にオープンエンドであり「未完のプロジェクト」であるがゆえに、「未来への構想力」の通路となる。

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

10

10

10. ダメット「過去の実在」1969

- The truth-value link (真理値連結、真理値リンク)
- 「過去時制言明の反実在論的解釈は、相異なる時点で発話される相異なった時制をもつ言明には、その真理値の間に系統的な連結があると認めることと、両立不可能であるようにみえるのである。この難点が論争全体の核心である。」
- 「もし私がいま『私はいま私の研究室にいる』と言うなら、私は、私の言葉どおり真なる現在時制の言明を立言している。この言明をAと呼ぶことにしよう。ところで、ちょうど一年後ある人が『一年前ダメットは彼の研究室にいた』という言明(これをBと呼ぶ)をなす、と仮定せよ。すると言明Aはいま真なのだから、一年経ってなされた言明Bも同様に真であることは、真理値連結の帰結である。」

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

11

11

11. 過去に関する実在論と反実在論

- 「実在論者が願っているのは、思想において全時間過程の外側に立ち、それ自体はいかなる時点も占めずに、すべての時点を一瞥のもとに見渡すような、そういう地点から世界を記述することである。(略)反実在論者は、我々が時間に浸されているという事実をもっと真剣に受けとめる。我々は時間に浸されているので、我々は時間の中に存在していない者に現れるであろうような世界の記述を目論むことができず、それがあるとおりに、つまり世界がいまある通りに記述できるだけである。」
- 「反実在論者にとっては、過去はそれが現在に残している痕跡の中に存在するだけであるが、実在論者にとっては、過去はそれが現在であったときそうであったまま、過去として、存在する。」(ダメット「過去の実在」)

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

12

12

12. 真理値リンクによる実在論擁護

- 「一年前に起ったことについて誰かが今語ることを真ならしめるところのものは、一年前に起ったことだ、ということに彼（反実在論者）は同意します。しかし彼は「一年前に起ったこと」という文句を「現在の痕跡が存在するような一切の出来事」を意味するものとして使っているのであり、これこそが彼にとって、一年前に事態がどのようなであったかについての言明を真とか偽とか真理値を欠くと決めるものだからです。我々は、起ったことの現在の痕跡に対して、過去についての言明を真ないし偽ならしめるものとして「過去に起ったこと」を対置したいと思います。それこそが我々の信ずるところ、真理値リンクによって顕揚される形而上学的原理だからです。」（ダメット『真理と過去』2004、藤田晋吾・中村正利訳）

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

13

13

13. 真理値リンクは形而上学的原理か

- 「私はいま私の研究室にいる」 (A)
→ 現在時制言明、正当化条件（真理条件）は知覚（目撃証言）
- 「一年前ダメットは彼の研究室にいた」 (B)
→ 過去時制言明、正当化条件（真理条件）は想起（記録）
- 現在時制から過去時制への時制転換は、言明の正当化条件（真理条件）の変更をもたらす。したがって、真理値リンクは自明の理でも形而上学的原理でもなく、それ自体正当化を必要とする。
- たとえば一年前の同時刻に隣りの研究室でX教授が殺害されたとする。その場合、ダメットのアリバイは真理値リンクによってではなく、一連の捜査手続き（物的証拠、他人の証言等）によって証明されねばならない。

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

14

14

14. 程々の (modest) 反實在論

- 真理値リンクは、それを正当化するには「過去自体（過去に起ったこと）」の存在論を要請せざるをえない。
- 「だがこの実生活で行われている過去はまことに貧弱な過去である。先に述べた現在への接続と他者の証言との一致、そして物的証拠という僅かに許された三種類の手続きだけを頼りにする未熟で貧相な過去が許されているだけである」（大森荘蔵「色即是空の存在論」、『時間と存在』所収）
- 「非の打ち所のない確固とした過去（大森）」を求めたがゆえに、ダメットは實在論に譲歩するに至った。しかし「程々の反實在論」に留まるならば、實在論への転向は必要ない。

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

15

15

15. 「反 = 反相対主義」の可能性

- クリフォード・ギアツ『解釈人類学と反 = 反相対主義』（小泉潤二編訳、みすず書房、2002）
- 「（反 = 反中絶論者）中絶に対する法的制限に反対する人は、中絶は素晴らしいと考え、中絶率さえ上がれば福祉が向上する、という意味で中絶賛成なのではない。（略）上のような枠組みでは二重否定が特殊な使われ方をしていますが、そこにこの修辭の意味があります。この二重否定は、拒まれている対象を受け入れることなく、拒んでいるものを拒むことを可能にします。これが反相対主義について私が試みたいことです。」
- 古典論理では $\neg\neg A \rightarrow A$ （二重否定）は恒真式だが、 A を $\exists xP(x)$ とすると、 $\neg\neg \exists xP(x) \rightarrow \exists xP(x)$ は直観主義論理では正しいとは言えない。

2024/9/21

ハイデガー・フォーラム第19回大会

16

16